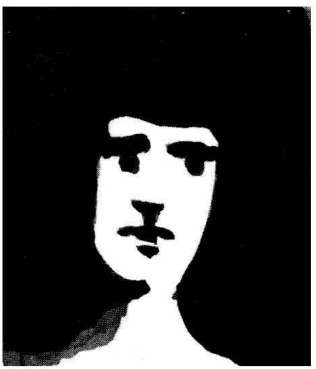
片肺飛行の青春

ある青年画家の愛と死

木野村正博 ／ 北沢杏子編



アーニ出版

木野村正博　一九五〇年生　岐阜県立岐山高校卒　岐阜県展・市展入選　行動美術中部地区選抜展出品　一九七五年死去

北沢杏子　一九二九年生　評論家　著書　こんにちは性教育　白夜のエロスたち　あなたはなぜ愛するの　開巻百笑他

片肺飛行の青春

© 木野村正 北沢杏子

一九七七年六月三十日第一刷発行

著者　木野村正博

編者　北沢杏子

印刷 製本　合同印刷

発行所　アーニ出版

東京都世田谷区上用賀四ノ二二ノ十三
振替 東京〇—一五八五五〇
電話東京〇三—四二五—三二四六

Printed in Japan　0095—0006—0126

片脚飛行の青春

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

片肺飛行の青春

■目次

1章 7
2章 51
3章 81
4章 124
5章 169
編者あとがき 211

装幀■長谷川瑞吉

「片肺飛行の青春」は、ホジキン病で片肺切除の手術をうけた画家志望の青年が、再発入院してから死までの実際の日記を編集したものである。

ホジキン病はHodgkinが一八三二年に記載した疾病で、一五〇年の歴史があるが病因は不明。末期症状がリンパ節の悪性腫瘍に類似しているので、一応悪性腫瘍として取扱っている。この病気はわが国では比較的まれで、十万人に〇・五人の発病率と推定され、男性の方が多い（女一人対男二・四人）。この病気もガンや白血病と同じように、現在の医学では治癒という言葉は使えず、そのほとんどが死の転機をとる。診断後の存命期間は、およそ三年半から五年である。

ガン、白血病、ホジキン病などという治癒不能の患者に対して、その病名を告げるべきかどうか、告げた後もなお闘病意欲を喪失させないためにはどうすればよいか――このテーマは本文中にもしばしば繰り返されているが、この問題は医学の進歩と共に、ますます大きな課題となるだろう。

下半身麻痺という苦痛と絶望のどん底にあって、なお彼の闘病意欲をふるい立たせたものが、絵に対する情熱とひとりの女性へのひたむきな愛情であったこと、そして彼女に会いたい一心できびしいトレーニングの末、遂に歩けるようになる巻末の手記は、読者に愛の力の偉大さを感じさせずにはおかないだろう。

編集者

悲しむことはない
いまの状態で自分には
何ができるかを考えて
ベストを尽くすことだ

サルトル

1

渡辺進の手記

親友の木野村正博が三月九日の明け方に死んだので、今年ばかりは、円鏡寺の桜がいつ咲きいつ散ったのかさえ気づかないうちに、月日はあわただしく過ぎていった。

たしか四十九日の法事の後だったと思う。伊佐山、西尾、僕の三人は、正博の親父さんから彼の日記を手渡された。もし、僕らの手で編集が可能なら、正博のために自費出版したいという。それは、例の右下りの特長のある字で大学ノート八冊にびっしり書きこまれた闘病日記——というより、看護婦野川晶(あき)への一方的な愛情をひたすら書き綴ったものだった。この日記には見覚えがあった。僕らが見舞にいくと、彼がベッドによりかかって、この日記を書いているのに、よく出くわしたものだ。

木野村の家を辞して、僕らは西尾の車で三十分ばかり走り、岐阜駅前のコーヒーショッ

プに入った。
「いまさら、こんなもの読むのは気がすすまんな」
僕は大学ノートをパラパラめくりながらいった。「それにしても、金田屋もよう書いたもんや。大体何が書いたるかは想像つくけど……」
金田屋は木野村の家業の屋号で、僕らは高校時代から彼を「金田屋」とか「マー坊」とか呼んでいた。
「ほんとや、どこめくっても晶……晶……晶……で俺達のことはさっぱり出てきよらん。あいつにとって俺達の存在は何やったのか、いっぺん検討せなあかんな」
と伊佐山がいった。
「そらあ、おまえ、どうひっくり返ったって比較にはならんワ。なんてったって女性は偉大ですよ」
いつものように西尾が反論に出た。「なんせ、下半身麻痺の男が、彼女に会いたい一心で歩けるようになったんやでね」
「ま、それは認めるけど、しかしやね……」
「しかしなんや?」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

法事の酒のせいか、これもいつものことだが、西尾がからみ始めたので、僕は二人をうながして外へ出た。駅前広場の噴水が、節電のためかごぼごぼと不景気な音を立てながら、それでも水面にネオンを映している。僕は、ふと、いつだったか正博がみせてくれた詩らしきものの一節を思い出した。

あなたは白い泡のようだ
水の中で美しい珠が揺れている
重さのないあなたは
水面に出るとたちまち消えてしまう……

たしかそんな意味のものだった。駅前広場の噴水を見ながら書いた——と彼はいった。

正博が一方的に愛し続けた野川晶に対して、僕は伊佐山ほどの偏見は持っていなかったが、といって西尾のように肯定的でもなかった。彼女のとるにも足らない素振りが、あんなにも正博を有頂天にさせたり、絶望のどん底に落し入れたりしたことを思い起すと、彼女は伊佐山のいうように「悪女」だったのかも知れず、西尾のいうように「天使」だった

のかも知れない。ともあれ、この日記帳を何とかしなければならぬ。僕らは、時間を作って誰かの家に集まり、少しずつ読み進めることを約してその夜は別れた。

家へ帰ると、机の上に筆跡に見覚えのない一通の手紙が載っていた。差出人は高山市立高山病院と印刷してある住所の下に、ボールペンで小さく、E・Hと記されてあるだけだった。

「正博さんが亡くなってから、もう二ヵ月近い月日がたってしまいました……」

手紙は、こんな書き出しで始まっていた。読み進むにつれて、差出人はある時期、しばしば正博の話題にのぼった看護学生半田悦子だということがわかってきた。

悦子の手紙を要約するとこうである。野川晶から正博の死を知らされたけれどもいまだに信じられないこと。彼が死ぬ前の約一ヵ月を過した県立岐阜病院第五病棟に、偶然、看護学校時代の先輩が勤務していたことから、彼の最後の様子を知らせて貰ってやっと納得したこと——そして、

「こうして亡くなられてみると、かえって正博さんの存在が私の心の中でどんなに大きかったかがわかります。彼を忘れるために、こんなに遠く離れた土地に勤務したのに……」

と書かれてあった。
正博が、まだ岐阜駅前の大谷クリニックに入院していた頃、僕は毎日のように見舞に行ったが、ある日、正博は、困った困ったを連発しながらも、得意そうにこういったものだ。
「おい、渡辺、晶に対する俺の気持は変らへんのやけど、もう一人変なことになってしまった」
「他の女に手を出したんか。お前も俺以上やな」
と僕が冗談をいうと、
「いや、まだ手を出したわけやないんや。向うが積極的で困っとるのや」
その相手が半田悦子だったのだ。そのあたりの事情は日記帳のどこかに書かれているだろうから、追々はっきりさせることにして、この手紙の中に少しばかりひっかかる箇所があるので、長くなるが引用してみる。
「実は私、彼が亡くなる前の日の三月八日に岐阜で野川さんに会っているんです。あの時なぜ、彼女は、正博さんが三重の大学病院から岐阜の県立病院へ移ってみえていることを教えてくれなかったのでしょうか。
はじめのうちは、私自身、正博さんのことは一切口にすまいと決めていました。でも久

し振りに岐阜に出てくると、なつかしさがこみあげてきて、どうしてもきかずにはいられなかったのです。私が『木野村さん、その後どうしてみえるかしら?』というと、野川さんは『相当悪いらしいわ。渡辺さんの話やけど……』という返事でした。その口ぶりから、ああ、正博さんはまだ三重の病院に入ってみえるんだなと思ったんです。ところが、最近野川さん自身からきいたんですけど、正博さんが亡くなる半月前に、彼女は県立病院に行っているんですね。それも、自分が結婚したことを告げに……。

正博さんにとって、永遠の恋人だった野川さんです。その人の口から直接そんなことをきかされて、彼はどんな気持だったでしょう。『重症の患者さんにそんなこといったりしてひどい』と私がなじると、『でも事実は事実やもん……』と、彼女はこともなげに答えました。

話は横道にそれましたが、私が高山から出かけていった三月八日には、正博さんは県立病院にいたのだし、亡くなったのは翌日の明け方だったのですから、彼女がひと言教えてくれさえすれば、最後に一目だけでも正博さんに会えたのに……と残念でなりません。もちろん、会えたとしても辛いだけだったかも知れないけれど、でも、せめて点滴ぐらいは私がしてあげたかった。正博さんはいつも、『君にして貰うと、ちっとも痛くないね』と

いっていたんです。

でも、いつまでも患者さんに特別な感情を持ち続けているなんて……看護婦失格ですね。いま思えば、正博さんに夢中になっていた頃の私はまだ学生で、看護婦としての自覚に欠けており……」

手紙は続いていたが、僕にとっては悦子の気持などはどうでもよかったのだ。問題は、野川晶が死期の迫った正博に会いに行き、しかも自分が結婚したことを告げている事実だった。それについて、僕は彼から何もきいていなかった。僕が見舞にいくのを待ちかねるように、どんなささいなことでも打ちあける彼だったにもかかわらずだ。僕は、彼が野川晶の結婚だけは知らずに死んだと思って、実はほっとしていたのだ。というのも、三重の大学病院で下半身不随になった時、彼は風の便りに晶の結婚の噂をきいたらしく、その日の日記には――、

晶、きょうある人から、近々あなたが結婚すると聞きました。もちろん、当然のことと思います。ただ、私が死ぬまで聞きたくなかった言葉なんです。そうなることはわかっていました。でも……いつそれを聞かされるか恐れていたんです。

人の幸せを素直に喜べない私の心を醜く思います。いけないとは思いながら、あなたの結婚が不幸に終ることを、そして私のもとに来てくれることを願っているんです。そんな自分が情けなくみじめになります。この噂が嘘であることを願っています。

と書いてある。死ぬまで聞きたくなかった言葉——それを、晶はわざわざ、いいに行っている。しかも、正博が岐阜の病院に戻って来ていることまで突き止めて……。

「あかん。取り返しのつかんことやってくれたワ」

僕は思わず舌打ちした。しかし、よくよく考えてみると、正博はもうとっくに死んでいるんだし、今更騒ぎ立てても仕方のないことだった。

それにしても、正博はなぜ、野川晶が訪ねて来たことを僕にいわなかったのだろうか。僕は、日記帳を最後の方から繰ってみた。日記は死ぬ前の年の十二月で終っていた。それ以後は全然書かなかったのか、あるいは彼自身の手で処分してしまったのかわからない。八冊目の最後の頁には、杖なしで歩けた！ と書かれてあり、

「もうすぐ晶に会いに行けると思った。春になれば病気も治るだろう。そうすればまた会える。もう少しの辛抱だと思った」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com